

大学スポーツの発展に関する研究

～バレーボール四国学連に着目して～

1200461 高橋 優梨香

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 背景

現在、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに先駆け、近年スポーツに注目が集まっている。月刊事業構想（2016）によると、日本のスポーツ市場規模予測は、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には10.8兆円になっていることが予想されている。これは、2012年の5.5兆円の約2倍の数値である。また、2025年には2012年の約3倍である15.2兆円規模の市場になると予想されている。この数値を実現するためにも、アマチュアスポーツ、大学スポーツの発展に期待が寄せられている。

その中で、日本では一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が2019年3月1日に設立された。このUNIVASは、アメリカ合衆国における全米体育協会（NCAA：National Collegiate Athletic Association）に倣い大学スポーツの活性化を狙う団体である。現在NCAAは23の競技を運営し、1200以上の大学から4万人以上の学生が参加している。NCAAは選手の安全を守るための組織として発足したが、現在では、その役割にプラスして学力管理、練習量の管理、大会運営、放映権の販売などを行うことで、収益を上げている。このNCAAがアメリカ合衆国の大学スポーツ市場を成長させてきた。アメリカ合衆国における大学スポーツ市場の規模は、8000億円でありスポーツ市場の中で2番目に大きな市場である（月刊事業構想，2016）。また、収益は年間で1000億円と言われている。

UNIVASは、「大学スポーツの復興を通じて卓越した人材を育成し、大学のブランド力強化や競技力向上を図る。もって、我が国の地域・経済・社会の更なる発展に貢献する。」を設立理念とし、UNIVASが核となり、大学・学生連盟（以下「学連」とする）と密に連携し、企業や消費者とも連携を図ることで好循環サイクルを実現することを役割としている

（図1）。また、UNIVAS設立によって期待できることや、拡充される新サービスは以下の通りである（UNIVASホームページより抜粋）。UNIVASは、「安心安全を確保した大学ス

ポーツの振興によって、卓越した人材の育成、人格形成・健康増進・学力向上、競技力の向上、スポーツの経済的価値の拡大、地域の活性化、大学ブランドの強化などが期待できる」としている。また、UNIVASが掲げる新サービスは大きく分けて「学業充実」「安心安全」「事業マーケティング」の3つがある。学業充実面では、学業基準の策定・普及、キャリア支援などが行われる。安心安全面では、スポーツ医学の研究、コンプライアンス・ガイドラインの策定普及などが行われ、事業マーケティング面では、地域ブロックにおける大会運営への助成、競技映像のインターネット配信などが行われる。

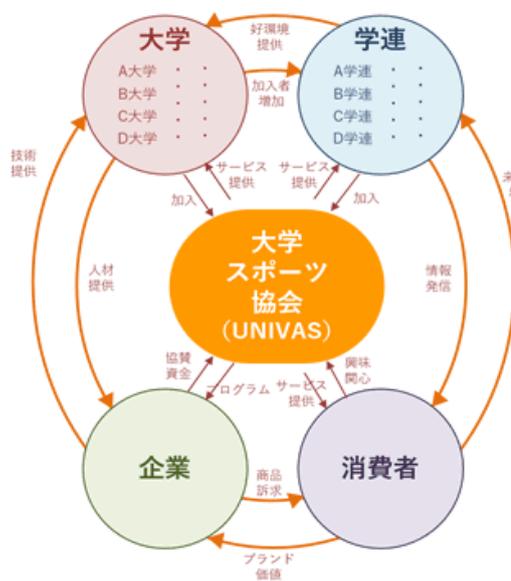


図1 UNIVASの役割（スポーツ庁，2019）

著者が所属する高知工科大学もUNIVASに所属する大学の一つである。しかし、当事者として機運を感じないという現状である。実際に著者が所属していたバレーボールの四国学連のリーグでは、リーグの観客数は少なく、盛り上がりに欠けていた。四国学連は運営に苦勞しており、その中でも、大学側からのサポートも見受けられない。他学連と比較して

みると、ホームページのレイアウトやパンフレットの質の差は歴然であり、予算不足から大会で公式ボールが使用できないということもある。他学連との大会の際のパンフレットの表紙に、四国学連の名前が載っていないこともあった。これらのことから、四国学連は現在マネジメント不足であると言えるため、まずは、学連の現状を変えていく必要があると考える。そのため、本研究ではこのような現状を踏まえ、これまで著者自身が携わってきたバレーボールの四国学連に焦点を当て研究していく。

2. 目的

本研究は、四国学連の現状と課題を分析し、他学連と比較することで、四国学連のより良いマネジメント方法を明らかにすることを目的とした。

3. 研究方法

3-1 インタビュー調査

四国学連の現状と課題について探るため、四国学連学生委員長を対象としたインタビュー調査を実施した。調査日時は2019年11月25日であった。インタビュー調査の内容は、運営、普及、財政の三つの観点から、主に、四国学連の現状や、現在四国学連が抱えている課題、大会運営について、UNIVASとの関わりについてであった。

質問内容は下記の通りである。

運営

- ・現在、四国学連が抱えている問題
- ・四国学連学生委員長の決定方法
- ・四国学連学生委員長として困っていることや願望
- ・他学連と四国学連を比較し、優れている点と劣っている点
- ・大会の開催県、体育館の決定方法
- ・他学連との連携について

普及

- ・ホームページやTwitterの管理方法
- ・UNIVASと四国学連との関わりについて

財政

- ・お金の管理方法
- ・大会での旧ボール使用の理由

3-2 比較（九州学連）

次に、西日本での大会でも優秀な成績を残しており、全国的な知名度もある九州学連に焦点を当て、九州学連の運営、普及、財政の3つの観点で四国学連との比較分析を行った。その際、四国学連でも取り入れられるような取り組みがないか、に特に着目した。

4. 結果

4-1 インタビュー調査

四国学連学生委員長にインタビュー調査を行った結果、運営面については、担当者の高齢化により、事務局担当県の輪番制が敷けなくなっているという現状が明らかになった。また、四国学連のリーグの開催期間がとても短いということ、リーグでの個人賞が無く、主に動いているのが四国学連学生委員長一人であるという面から設置できないという課題があることが明らかになった。普及面については、ホームページやTwitterの管理人材の不足が課題であり、UNIVASについては、これから関わっていく予定はないとのことであった。財政面では、四国学連に所属する各大学の経済状況を加味し、大会で旧ボールを使用することとなったことが明らかとなった。

インタビュー調査全体の回答内容は下記の通りである。

運営

- ・現在、四国学連が抱えている問題
 - サポートしてくれる先生の高齢化に伴い、担当県の輪番制が敷けなくなっている。
- ・四国学連学生委員長の決定方法
 - 輪番制の担当県の委員長が四国の委員長になるという形で決定されている。
- ・四国学連学生委員長として困っていることや願望
 - 主に動いているのが自分だけなので不安である。リーグで個人賞などを作りたいと考えているが、一人しか動く人がいないため、できないのが現実である。
- ・他学連と四国学連を比較し、優れている点と劣っている点
 - 優れている点は、リーグ期間がとても短いことである。選手目線では劣っているかもしれないが、運営側からすると、負担が減るので楽という印象である。
 - 劣っている点は、個人賞が無いことである。

- ・大会の開催県、体育館の決定方法
輪番制と同じように各県に任せている。体育館は予算のかからない大学を使用することを推奨している。
- ・他学連との連携について
西日本バレーボール大学男女選手権大会は、中国、東海、九州、四国で担当して回す。その時と年度末に開催される西日本総会、全日本総会、全日本バレーボール大学男女選手権大会で関係を持つ。総会の内容としては、大会での反省と課題を出し、そこから来年の運営方法などを決める。また日本バレーボール協会（JVA : Japan Volleyball Association）などのバレーボール協会からの連絡などを回す場としても活用されている。

普及

- ・ホームページや Twitter の管理方法
主に私（四国学連学生委員長）と松山東雲女子大学・短期大学の先生が担当しているが、人員不足である。
- ・UNIVAS と四国学連との関わりについて
今後も主に関わっていくことは少ないと考えている。

財政

- ・お金の管理方法
松山東雲女子大学・短期大学の先生が一任して担当している。
- ・大会での旧ボール使用の理由
各大学の経済状況を鑑みて決定した。主に影響を受けるのは、全日本バレーボール大学男女選手権大会出場チームだけということで、影響が少ない方をとった形である。

4-2 比較（九州学連）

西日本の大会などでも優秀な成績を残しており、知名度もある九州学連と四国学連をインタビュー調査の際に軸とした運営、普及、財政の三つの観点から比較した。比較には、主に九州学連のホームページ、Twitter を用いた。

運営面においては、九州学連の大会の開催期間は一ヶ月ほどと、四国学連と比べて長く、大会での個人賞もあるということが明らかとなった。また、個人賞は Twitter にも記載されていた。

普及面においては、九州学連と四国学連のホームページを比較すると、レイアウト、見やすさの違いが歴然であった。

Twitter のフォロワー数は四国学連の約三倍であり、更新回数も多い。他にも、九州学連ではリーグ開催に伴い、小学生へのバレーボール教室を積極的に開催していることが明らかとなった。

財政面においては、九州学連では、大会で旧ボールは使用していない。また、九州学連はホームページの中で、プログラム広告協賛依頼という項目を設けていることから、営業を通じて協賛を募っており、四国学連と比べると財政に余裕があると考えられる。協賛を募るだけでなく Twitter では、旧ボールの販売活動もしており、九州学連自らが、資金獲得のための活動を行っていることが分かる。

5. 考察

以上の結果より、四国学連は運営面、普及面、財政面の三つの観点全てに課題を抱えているという現状にあり、現在それらを克服できるような取り組みが実行されているわけではないということが明らかになった。そのため、まずは、その三つの観点から課題を整理していく。

まず運営面については、四国学連の一番の問題点として、圧倒的に人が足りていないという現状がある。四国学連のリーグとしては九州学連のリーグに比べて、開催期間が圧倒的に短い。これは、学連に加盟している大学数が四国学連の方が少ないということがその原因の一つであることが影響していると考えられるが、それだけではない。四国学連のリーグでは、一大学とは一回しか戦うことはないからである。そのため、四国学連のリーグは試合数が少なく、リーグの開催期間も短くなっている。また、九州学連では、リーグで個人賞があるが、四国学連のリーグでは個人賞が無く、話題性に欠ける。個人賞があるリーグと個人賞が無いリーグでは、選手としてのモチベーションにも違いが出てくるのではないかと考えられる。

次に普及面については、九州学連と比較した中で、九州学連が行っている、リーグの開催に伴う小学生へのバレーボール教室は、四国学連が現段階ですぐに真似できる良い取り組みだと考えられる。小学生へのバレーボール教室を開催することで、地域と学連が関係を持つこととなり、互いに助け合える関係性を築いていける一歩となるのではないかと。四国学連のリーグは開催期間が短いこともあり、リーグが開催され

ること自体の認知度が低い。そのため、このような取り組みがなされれば、少しでもリーグの認知度を上げることができるのではないかと考えられる。

最後に財政面については、リーグでの使用ボールの違いなどから、四国学連が財政面に問題を抱えていることは一目瞭然である。九州学連のホームページの中にはプログラム広告協賛依頼という項目があり、協賛を募っていることが明らかとなった。現段階で四国学連のホームページの中にそのような項目は無く、魅力あるリーグ作りをするとともに、協賛を募ることも必要となってくるだろう。

運営面、普及面、財政面の三つの観点でそれぞれ課題があることが明らかとなったが、その中で著者は四国学連と UNIVAS との関わりがないことも重要な改善点であると考えられる。現段階では、UNIVAS 側からも学連側からも歩み寄っている現状は確認できていない。学連として補助金を受け取ることができたり、学連側は様々な権利を持っていたりするため、学連側の UNIVAS に対する意識を高めることによって好循環が生まれることも期待できるのではないだろうか。

6. まとめ・提案

6-1 まとめ

本研究では、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに先駆け、近年スポーツに注目が集まっている中で、今後市場の拡大が期待されている大学スポーツに着目した。その中で、著者自身が所属していたバレーボールの四国学連に焦点を当て、四国学連の現状と課題を分析し、西日本の大会などでも優秀な成績を残しており、知名度もある九州学連と比較することで、四国学連のより良いマネジメント方法を明らかにすることを目的に研究を行った。四国学連の現状分析、四国学連学生委員長へのインタビュー調査、九州学連との比較より、四国学連はまず、人材不足で苦労しており、UNIVASとも今後関わっていく予定が無く、財政的に苦しい現状を打破する具体的な策も実行されていないなど消極性が明らかになった。九州学連が行っているような学連のリーグの開催に伴う小学生へのバレーボール教室など、学連独自の取り組みを行おうという動きも無いことも分かった。

6-2 提案

この結果を受けて、四国学連の現状・課題を解決していくためには、まず、人材が必要となってくると考えられる。この人材というのは、運営する側の人だけでなく、四国学連のリーグなどを見に来てくれる人、四国学連に関わる人全て、様々な人が必要となってくる。また、運営する側の人を集めるだけではなく、集まった人を動かす仕組みも必要となっていくことも容易に想像がつく。四国学連は九州学連と比較した際に、やはり、旧ボールの使用などを始め、財政的にも苦しい現状にある。この四国学連の人材不足、財政難に対する解決策となる提案をしたい。

まず、人材不足と財政難を分けて考える。財政難に対し、お金集めの方法で考えられる協賛等を行うことで急にお金が集まると言うことは、現段階の四国学連、四国学連のリーグの魅力では考えられない。四国学連が運営体制を強化し、様々な施策を展開することで、話題性や認知度が上がり、四国学連の魅力が向上し、その結果企業やファンにアピールができると考える。問題点の一つである人材不足を解決するためには、まず学生委員を拡充する必要があるだろう。現在は学生委員長のみが運営に積極的に関わっているため、そもそもの人材不足が課題となっている。四国学連に所属している各大学から運営のための学生委員を選出し、運営チームを作ることが重要である。

次に、話題性を持ち、四国学連の知名度や魅力が向上するようなこととして著者が提案したいのは、四国内の大学とタイアップによる、フレンドリーマッチを行うということである。これは、大阪体育大学と武庫川女子大学によって行われたBチーム同士のフレンドリーマッチを参考にした。Bチーム同士の試合にも関わらず、チケット代を500円とし、財源の確保にも繋がっている。四国におけるフレンドリーマッチの概要は、四国内の大学の中でもターゲットとするのは、高知工科大学や高松大学、四国大学などの大学にスポーツマネジメントがある大学とすることで、大学スポーツの発展だけでなく、スポーツマネジメントの研究教育の一環にもなるのではないかと考えられる。スポーツマネジメントを学んでいる学生に大会運営を担当してもらうことで、企画、プロモーションも充実し、四国学連に関わる人そのものの増加にも繋がる。このようなフレンドリーマッチを行うことで、話題性を生み、企業へのアピールになると考える。また、毎年同じ

体育館で行っていくことで、認知度の向上にも繋がり、ファン獲得にも繋がるのではないかと考えられる。試合に出場する選手の観点からも、試合数が増え、モチベーションアップが予想されるため、四国のバレーボールのレベルアップにも最終的には繋がっていくのではないだろうか。四国のバレーボールのレベルが向上するということは、四国学連の魅力が向上することになり、人材不足、財政難に対して、解決していくための必要な要素の一つとなることが期待できる。

今後の大学スポーツの振興に向け、学連自体も運営や連携を強化し、新たな取り組みを行うことによって、四国学連独自の価値を提供できるようになることを期待したい。

7. 研究としての課題

本研究では、四国学連との比較対象として九州学連という一つの学連としか比較できていない。そのため、他学連との比較も今後は必要であると考えられる。また、今回提案したフレンドリーマッチに関して、ターゲットとしている他大学に対し、この提案の話はできていないという現状である。具体的な提案をもって、四国学連の活性化にも貢献していきたい。

引用文献

[1]月刊事業構想 2016,11

[2]UNIVAS 大学スポーツ協会オフィシャルサイト

<https://www.univas.jp/>

[3]四国大学バレーボール連盟

<https://shikokuuvbf.wixsite.com/toppage>

[4]九州大学バレーボール連盟

<http://www.kyushugakuren.jp/>

[5]「フレンドリーマッチ 2018 大阪体育大学×武庫川女子大学」

<https://ouhs-athletics.jp/column/column08/>

[6]九州大学バレーボール連盟 Twitter

<https://twitter.com/gakurenja>

[7]スポーツ庁

一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）設立概要

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/univas/index.htm

